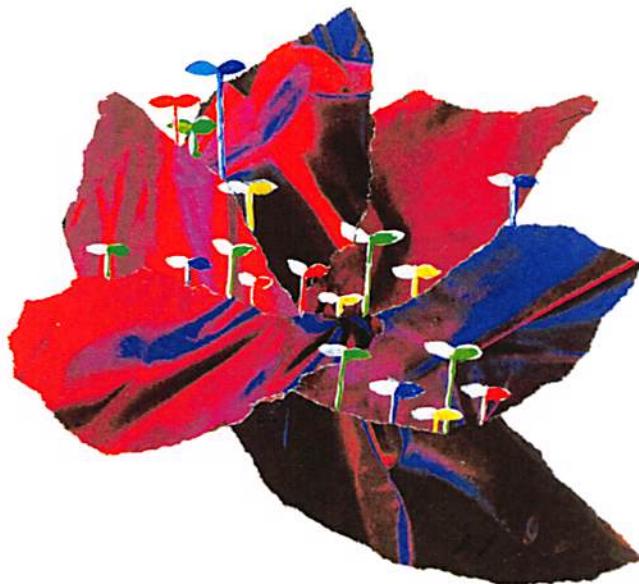


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 8



令和4年8月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第8号

No.771

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未聞なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地 中 海

一一〇一三年 八月号 (通巻七七一号)

◇今月の二十首詠……無言の力

設楽まゆみ 2

■作品[A]

磯田ひさ子・市原やよひ他 4

A C B A

芦田美代子他 54  
遠藤千恵子他 66

高原 桐他 42

須川千恵香・鈴木文子他 80

もとむらゆみこ・長尾さち 16

◇今月の二人

加藤英彦 34

■近藤芳仙歌集『茅花』批評

本元由美子・浜脇景子 50

生の濃密さと向きあう日

玉井綾子 51

■御代田澄江歌集『花の透走曲』批評

田土成彦 52

『花の透走曲』感想

田土成彦 53

フーガの日常

養学登志子 54

身ほとりのレクイエム

■講演「短歌の縁・人の縁」

関根榮子 48

香川進の生きものの歌 46

田土成彦 15

◇シルクロード・カフェ

木村文子 52

私と短歌との出会い (29)

浅川広子 19

■遊覧香港へ『生きるヒント』五木寛之

松本多摩子 50

送風塔

本村誠人 51

■歌壇月旦

玉井綾子 71

■六月号作品批評

72

A……養学登志子・泉嘉穂子

B……杉浦詩子・安部律

C……柴田登志恵

オリーブ集……関根和美

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

最近の歌誌より

〔編集部〕 93

クリップ……94

神田通信……表3

(表紙デザイン) 2003年8月号

## 無言の力

### 設楽まゆみ

朝夕に木の葉しぐれは絶え間なく來し方寄せて掃く庭ぼうき

引き潮のことく吾子のこと杳くなりまぼろし絵図か四十年の経る

君生まれ小さき足跡知られずに齡三つで身罷りゆきぬ

アンパンのような丸顔ほころばせわれにまつわる末子の君は

小窓よりテープ引き出す悪戯に叱ってしまいぬ知恵づく君を

命日の春四月となりわが裡の空洞に吹く砂けむり痛き

珊瑚樹の木の下兄らと遊びし子なぜあの場所へ足を向けるたる

「基地へ行く」独り姉らと離れ去り危地とも知らずひきこまれゆく

昭和二十三年生まれ。本名、細川美洋。  
羊グープに所属。

歌集に「春の潮」「明日菜」、  
随筆に「紅いチューリップ」がある。

すかし百合鉄路に散りて哀しけれ蒼白の顔になみだの跡の

聖句学ぶ身にふりかかる禍事の信じられぬ神のみこころ

救急の寝台に握るわれの手を「ママ遅かったよ」と無言の力

病身の姉に元気を譲らんとまゝさらな生命惜しまず与うや

明け方の病室にひらく小さき掌 生命線をなぞりただ見つむ

内省は日日深まりてこうべ垂るかがやく生命守られぬ罪

カタカタと風に揺れ応う白木の位牌死者と生者の密なる対話

身をねじり「もう責めるなよ」同窓の温かき声に親しみ覚ゆ

花水木いっせいに花つけ春告げるこの幹に秘めしイエスの受難

哀しみを喜びとして受け入れこの地上にて歌ごころ紡ぐ

夢に立つ吾子の笑む顔大写し 二女身籠もるを知り頬ゆるむ

いみじくも逆縁の渦に巻きこまれ定めに負けぬ花のつばみ産む

# 作品

A

磯田ひさ子

カリンカ

・森

梅本武義

キャッチフレーズ

・羊

核兵器 生物兵器をブーチンは使ふかも知れぬとお昼のニュース  
太陽を浴びつつ踊りしはまぼろしかロシアの民よ「カリンカカリンカ」  
長けば混迷極む 真実はわからぬままにロシアの侵攻  
日本の米軍基地の七割が沖縄にあると知らず過ごしき  
「胸きゆん」と株式投資のコマーシャル高齢者をもその気にさせる  
わが意見採らるるたびに身が竦むたれかがきつとがまんしてゐむ  
スカイツリーめぐれなごむやうやくに浅草に根を下ろしたるらし

市原 や よ ひ

あじさい

・萬

夫の介護に係わりくるる人々の会議開かる年に一度の

明日集う五人の為に飾り置くまだ色浅きあじさい一枝

介護度の更新ありてそれぞの主張を捌くケアマネージャー

穂やかな笑顔マスクの中に入り担当者会議終わりとなれり

他人の手を借りねばならぬ事増えて夫の心を覗いてみたい

湯に入れぬ夫の為にはあらねども菖蒲湯焚かすにいつか過ぎ行く  
母に似し姉の声聞くその先に広がりゆけるふるさとあれこれ

少年の日の畠すべて呑む山の木々は新緑小綏鶴が呼ぶ  
少年の日の火遊びを思いつつ枯れ木々集め竹の子湯插く  
菜園の「鳴門金時」根付くぞと予報通りの雨音を聞く  
菜園を狙うけものを撃退の専守防衛時おり負ける  
食料も天然資源も豊富にてサタンも育つロシアの大地  
感染の責任を部下に転嫁して良き領袖を金正恩演す  
「十億円当てて造ろう核シェルター」キャッチフレーズにならぬかこれは

大浪 美雪

掘り立て

・森

やうやくにホホバオイルの溶けたるにまたも凍りぬ花冷えの朝  
さみどりの木木をぬひゆく溝川に小魚群るるや水輪広こる  
淡竹よりかぐや姫ならぬいも虫のころがり落ちぬころとまる  
掘り立ての筈包む新聞の写真のブーチン泥まみれなり  
ものの影間に沈みし庭烟にゆさゆさ広がる落の葉の海  
雪の下に摘みしと届く薺の臺一度目の春のにがみいただく  
ひむがしの雲押し上げて一筋の真紅き光今日のあけゆく

## 奥田陽子 イズム

・羊

あまたなるイズムのいくつ縙くにさむさむと立つ政治のことば  
夢のなかに出でてくるやも眼つぶりて「民族淨化」の言葉を蔽う  
蒸し暑く寝がてにいる四月尽職火烈しと伝えくるのみ  
怖がりのあの子に見せて良きものか空爆砲撃燃えあがる家  
奔流に崩れてならずと強化なす護岸工事の音耳压す  
堤防の工事音さえ身にひびき戰火の彼の地日ごと思える  
幼な子の折りてゆきたる大小の紙の動物笑みて語らう

## 小野雅子 五月

・羊

芍薬忌と姑は呼びたり畠にて供へたる花ほころびはじむ  
お命日ですねの電話からなくなりぬ老い増すひとりを見つむ  
親友の若雷のことばが「折々のことば」に戯りぬ五月七日に  
駅へ行くバスが滅便 客は滅りドライバーは高齢化して  
引き抜きて五センチ切りて重ね縫ふゆるくなりたるバジャマのゴムを  
白髪の人を探せばわれがるる七十周年記念号なり  
遊きし人ら若き面輪で笑み交はす時をとどめて厚き記念号

## 神田鈴子 五月

・大

雨去りて紫陽花の葉のみどり冴え五月の庭のややに明るむ  
うぐひすのこゑ透りくるこのあした五月の空に青澄みわたらる  
母の日に子より届きし鉢植ゑの薔薇は匂へりひとり居の朝  
子ら集ふ孫のバースデーひとりではせぬ久々の焼肉パーティ  
仕上げたるバーステーケーキのうす紅の苺のムースはほのかに甘し  
いつまでのケーク作りかしみじみと心をこむる今のこの時  
連れて来しボメラニアンは家族なりつぶらなる眼に意を告げくる

## 菊地栄子 かたくり

・鴻

逆さまに押してしまったスタンプを暫く悔やむ許せるまでに  
隣室の板戸音たづ振り返し姉との旅がぐらつき始む  
おそらくは地震の安否を問うメール黙して庭の冬草を引く  
坂道の真下のわが家を振るがせてダンプは下る寂静まる頃  
日溜りに続びたるしら梅を数え直すもまだ五・六輪  
ゆくりなく晴れ渡る朝しら梅を喰りて巡る蜂の忙しき  
咲いたとて向かいの丘のかたくりを口々に言うクラブの帰り

## 北山雪男 リラ冷えの街

・伊

休日の息子一家の煙轍 身の丈ほどの空にたゆたふ  
ばあさんは波の女でいそいと寄せては返す孫子の渚  
一本の樹となりそよぐ妻である枝に一人の孫を遊ばせ  
深海魚図鑑になごむ孫娘はや孤に籠り明日より五歳  
たまにしか会はぬ爺にて跡しき顔のチビ助抱けばむづかる  
見送られ題返せばさびしくも老いの視界にリラ冷えの街  
脚伸ばしまだ腰のはしき起むとす昨夜の抜け殻夢に残して

## 木村文子 あお

・羊

二〇本四千円で売られる小さな薔薇にも矜持はありて  
青空は君にも我にも青い空みてあおに違いはあれども  
はしご段昇る心細さかも血族少なく年をとりゆく  
守られていた日々はるか父の背に負われていたもの引き受け歩む  
さすらいて帰りしことく一枚の絵はがき届く郵便受けに  
鶴と遊びし思い出我にあり少しつつかれ泣いた記憶も  
まだ雪が解けきらないから札幌の五月マラソン中止となりぬ

草刈十郎 春雷

・世

咲いた花ならば散るのは覺悟などと何も言はない桜散るなり  
春の雨卒寿同士の長電話受話器を置きてしじまに戻る  
戦なき日本の空を仰ぎ見るつばくろ飛び交ふ昨日も今日も  
ウクライナの母子春寒のバスで発つ何が待つのか不安な間へ  
思ふごと体動かぬ身となれども一度風のこと歩きてみたし  
この星に暮す他のなきわれなれど時に吠えたき春雷のこと  
ウクライナの惨状今日も見るにつけ戦なき国に住む幸思ふ

國井節子 明石の海

・春

ああ五月明石の海はまぶしくてあわてて掛ける色付眼鏡  
海峡に入りの船の大小をみな受け入れて白く浪立つ  
横たはる淡路の島より心地よき風と味とを運んでくる  
連休にふたつ違ひの妹の一家とひとときバラ園めぐる  
老姉妹腕を組みつつ歩を合はせ杖の代はりとバラ園めぐり  
薬師寺と平山郁夫の結び付きガンダーラの絵の生き生き輝く  
昼も夜もリズム正しく脈打てる心臓の音まづはよろこぶ

河野繁子 五月の山

・雁

山いばら松にからみて真っ白の花詠歌する山頂近し  
NHKの電波とどかぬ狭い町見下る山にサテライト建つ  
サテライトの管理の仕事に通いたる日の頭つらしき夫と佇む  
いすこより来たりしものか星の駅に長居したりし八十九歳  
山城へかけあがりくる兵士など彷彿として匂う野いばら  
山いばら野いばらの遠い教わりつ五月の山の気を深く吸う  
山野草に心の虚をいやされて歎びのあり一日の過ぐ

小林能子 「地中海」70周年

・羊

衰へてなほこちやこちやと愛ほしき日々の流れは「地中海」に注ぐ  
「地中海」70年の陰影に新たなる20年創れる仲間  
十代の私が話したかつた人わが父と香川進先生  
「一粒のヒマが戦闘機を飛ばす夢」能子にはこの歌があると先輩  
（昔話）採訪課題に塚崎先生「現在ならまだ間に合ふかも」と  
もう一度タイへ行きたいと足立さんの声痛切にいまのわたしに  
「地中海」70周年アルバムに今日は陰気な脳も明らか

近藤栄昭 たら

・虹

今日ひと日何かを成せばよき日なりお浸し採りに荒川土手へ  
海面が上昇するか海水浴岸塗ぬれる高さを探る  
夕焼けに向かい走れば早まるか地球の自転老体エンジン  
男体山標高下がることあるか荷物を背負い登山者登れば  
ダ・ビンチは「海は地球の肺」なると津波百回くしゃみ恐れる  
暖かく包まれふわふわ雲になり魚になつてうさぎになつた  
今日ありし荒々しきこと治まらず星描れているチラチラ降るか

近藤芳仙 春は

・信

はないかだ静もる涼の岸辺には子龜が甲羅あたためてゐる  
春風に紫モクレン大き花びらをときてけふあり青空の下  
若竹の日に日に丈をのばしうき隣地よりきてわれを懼ます  
白透ける独活を酢味噌にあへし日の四月ロシアの侵攻やまず  
春萌えの柿の若葉よ陽をすかし照りかがやきて風をそよがす  
煙の面にのびひろこれる草草の縁き命のちからづよかり  
草避けてけふ植ゑてゆく野菜苗 根方に入れる腐葉土をもつ

## 坂上直美

五月の空

・天

## 篠原まり子

五月

・羊

幾年の君なき夏を過ごすらん雲に向かいて遠く眼をあぐ  
雨につけ晴につけても君想うヴェランダに出でてひとり佇む  
リスを飼う夢を見てけり背を撫する触覚はこれ猫の記憶か  
猫も君もわれを遁して先立ち写真は今日も笑みかけけれど  
天翔る翼もあれよ君が許なべてを捨てて飛びゆくものを  
雲となり君が御許へ飛びゆかん空のはたてに迎え給えや  
彼の山もまた彼の山も縁濃しいざ衣干せ夏は近づく

## 坂出裕子

コロナ

・洛

マスクして帽子をかぶりうつむきて歩けば人に会ふこともなき  
面会は全面禁止、病院の入口に立つ看板さびし  
幼なかりし日の戦争のあの頃を思ひ出さするコロナ禍の日は  
コロナ禍に閉ぢこめられてゐる日々も花は咲きをり実を結びをり  
草を刈り落ち葉を拾ふひとときはコロナに遠きあはせの刻  
とほき日の童話の世界ひもときてコロナ疲れのこころなぐさむ  
こんなにも花は美しかりしかなコロナの春の静かなる庭

## 佐藤道子

散歩

・甲

くると走りて見せる豆柴犬「走らないの?」と問はれもねえ  
飼主は若ければ犬の意のままに小走りにゆく朝の散歩を  
気付かねば吠えて寄りくるレトリーバー立ち上がり私の顔舐めたがる  
重たげな体寄せくるブルドックウーウー話す淋しげな眼で  
一心に網引き走り寄りて来るぬひぐるみかと思ふ小さき犬が  
久し振りに会へばにこにこ首振りて挨拶に来る柴犬「チロ」は  
散歩道次々なじみの犬と会ふ今日は犬の日犬の時間が

水槽の名も無きメダカ気遣いし体の曲った一匹が死ぬ  
街中の久留米つつじは真っ赤か人の群れなき赤を寂しむ  
シーサーの眼らぬまなこ五十年のちも変わらぬ基地の存在  
ウクライナかの地に咲く花「ひまわり」の花は果てなし命を悼む  
子育てを見上げて密か燕の巣見知らぬ人と暫し佇む  
鉢植えの青きトマトの円ら実を数え数えてひと日が暮るる  
忘れ得ぬ五月は遠く師の涙若き歌人を惜しみ給いし

## 柴田登志恵

五月

・天

使ひ勝手悪き国連安保理とわれらが憲法五月の空色  
夜の間に爆破せられしを朝ごとに修復する日常回帰  
明らけき朝を迎へずシェルターの間に如何ほどとどまりたらむ  
母使ふ医療介護費多けれど小型爆弾ひとつがほか  
燕來し朝のきれいな退休は母の卒寿とまつすぐ向き合ふ  
古き家の芥選り分け片付けしが母の脳内散らかり放題  
青風荒ぶるままにさくらんば前線ゆつくり近づく気配

## 鈴木結志

書の顔

・福

道風の「小島切」書は鼠<sup>ねずみ</sup>筆か纖細にしてはずむ迫力  
最澄の義之の法帖入り書風おもむき清く書の顔満たす  
古今和歌書のうるわしく目にさやか紫式部のかなに手習う  
伝統の「高野切」書の文字の美にひかれて学ぶ生きの執念  
おのが書の演技の進化ころがけ独創的なアイデアを生む  
「生命の尊厳と平等」日蓮の不滅の宝典こころにきざむ  
守護神の教え筆とりみずから生きのあかしの書の顔を生む

関根榮子 紬さや

・埼

高津砂千子 つばめ

・新

・風

暮れなす街の風景眺めつつカフェになつかしきレモネード飲む  
帰らんと思ってなおもレモネードのグラスの底の氷を含む  
振り鉄の人二・三人々する鉄路のはとりの野芥子の茂み  
庭先の小さき菜園に起き出でて露まみれなる絹さやを摘む  
畠中のツルボの花を掘り来しが昔は墓地と知りて返せり  
バセリのみ食む背虫を摘まみ取る指先しばらくバセリの匂い  
仲磨呂のはるけき想いいかばかり行く野の空に月昇りくる

関根和美 検査

・埼

滝田靖子 求人広告

・新

X線CT造影剤MR-Iすむ検査にこころふさがる  
ホスピスにいる君のうた待ち合いで読みつまぢかくその吐息きく  
いくつかの病告げられしかすがに死までの距離を父母は示すも  
最悪の疑い暗れて極月の経過観察の予約とらざる  
のどこぶ癒しくれたる枇杷の葉に母逝きたりと礼を述べつつ  
枇杷の木を見上げずありし日々の間にああ色づきぬ高きに三粒  
杖つかうことを好みぬ母逝きて三本の杖われにのこさる

高尾恭子 ひとりを生きる

・大

竹下妙子 活火山

・霧

三人に減ってしまったコロナ禍の来し方それぞれ黙して花宴<sup>かいん</sup>  
引き籠もる汝にとどかぬ遠めがね黄色い薔薇の香につつまれて  
銀鏡のメガネの奥にひかるものありて青年は還暦を越ゆ  
セイフティーネットとどかぬ豊中の高級住宅一角の壁<sup>かべ</sup>  
親切な紺がほだしに変わるから電話が怖いネットがこわい  
青すぎる五月の果てを一点の影となりつつ窓は消えたり  
一人では生まれられない血脉のどくどくとしてひとりを生きる

再びを働くつもりのないものを求人広告丹念に見る

今はもう会へない君の声がする雨降る夜の心の奥に  
おやすみとふメールいつまで残しあくもうこの世では会へない君の  
コロナ禍といふ窮屈に自らを殺めてしまふ幾人のある  
自らを殺めてしまふほど深い淋しさコロナ禍三年目の夏  
さやうならではなくありがたうと言ふ命を絶つてしまひし人に  
淋しさに命を失ふ人のるてひとりなることひとりであること

「韓国岳」とふ美しき名を持ち羨望の活火山なれば常に地は燃ゆ  
活火山真澄の空によく似合ふ裡なるマグマ如何に鎮めむ  
膝の痛みこころの疼き病む吾の負ひるるすべて罪のことしも  
古き罪新しき罪重ねて瀧過紙したたる珈琲みつむ  
春寒の小川にはなびら流れゆき吾はいづこの流れに乗らむ  
里山も霞みて見えぬ春なれば吾の思ひもおぼろに置かむ  
有りのまま生きたしと思ひ涙出づ風すさぶ夜をひとり覚めゐて

右の手にいちこと葉<sup>葉</sup>葉左手はブランター引く無理と思わず  
あさまだきブランター引く手のすべりズシンと尻もち 子は旅行中  
ああ何が起ったのかよ曇り空いちご飛び散り夢も飛び散る  
声に出し「丸太ころがす要領で」横向きになるゆっくりころり  
手や足の動き確かめ息をつく骨折せしも脳<sup>のう</sup>はたらく  
咳あくび普通にできぬもどかしさ腰椎骨折して三日間  
朝の五時つばめがついと飛んでゆくビイとひと声すがしさ残し

田 土 成 彦 尺 取

・宙

一センチばかりの尺とり尺をとる姿に進むわが手のひらを  
午前五時目が覚めて聞く始発車の音軽やかに鉄橋をすぐ  
ああれば時間の尻尾目の前を過ぎてたちまちに電車遠のく  
フロイドの「夢判断」は処分して『正法眼蔵』いかにすべきか  
たかだかの百年ばかり墓地変じ高層ビルは辺り睥睨す  
草の雲雀道に出てすぐ草に入る人の知るなき用事もあらむ  
鳥取の二十世紀の出る頃とレジ袋さげスパーに行く

田 土 才 惠

合唱祭

・宙

手縫り持つ衣装の裾の銀ねずの純く光れり段上るとき  
忘れてはならじと口角上げ氣味に歌うゆとりもわざかに生れて  
客席の位置確かめて意識下に歌えはいくばく落ち着きを得ぬ  
コロナ禍に負けず励みし一年の辛苦に歌う組曲「民話」  
うたの声は紡ぎ重なり響きつつホールに満ちて今極まれり  
一丸となりし成果のほどけつて樂屋へ戻る裏階段を  
達成感轟いて帰る日の暮れをそれぞれ急ぐ主婦に戻りつ

玉 井 綾 子 今 日

・羊

沖縄の復帰五十年八重山に涙のぼり泳ぐ民家多々あり

原爆忌に授業のありて「今日」の意味今日学べしはコロナ禍の益  
令和二年の担任だった先生は別れの言葉もなく異動せり

コロナ禍の行動制限なくなりて車内にまたか吐瀉物の跡  
真夜中の豪雨の音に毛孔から銃弾が出る夢見の悪し

冷蔵庫そっと開ければコンマ秒遅れて点るライトのまぶし  
刈り立ての芝を椋鳥、四十雀、雀、鳥に鳩のついばむ

虎 谷 信 子 思ひ出

・伴

対馬へと渡る夜船の揺れ止まず。鳥賊釣り漁り火並みて躊躇する  
ことさらに甲板にぞりあくがる心にしみぬ。湯き珈琲  
赤米の神事伝ふる家めぐり、注連結ふ門は秋草乱る  
頭屋びことばなし。別れ来て時雨るる坂に神奈備のぞむ  
遊覧船はかなく寄する潮干道。落葉ふみつつ、舟越に出づ  
愛しくも花摘み袋びあり。小さきがそれとしづけき堂に  
島山を巡りめぐりて、遙ふ花は、やさしき中のつきてらしとぞ

中 島 央 子 鬼 瓦

・森

庇うつ雨音はげし母亡き家大黒柱のかたへに目覚む  
咲きそむる桜に痛し音立てて篠つく雨のけふまた寒し  
明治初期米屋でありし名残にて「こめや」と言はる母の生れし家  
年貢米積みあげしと聞く土蔵令和の巷を鬼瓦にらむ  
自律神經の不調に沁みよ富士山の湧水両手にあふれさせつ  
婚礼の雅楽ながらる御社に今は昔の頭を垂るる  
後繼者なきを嘆かふ声のする芭翁の無人スタンド

中 島 義 雄 桜散る

・岡

夕陽照る前山桜の明るさに就活半ばの孫が吐息す  
人の死に闇はりもなく夕晴れて遠山桜を静かならしむ  
舗装され逃げ水明るき村の道過ぎし妹の翳も映さず  
春といふ広き机も昏れ昏れて東スラブに哀しみ奔る  
東スラブ五千万人に重火降り村上春樹の文湿りたり  
桜散れ惜しみなく散れ老いて病む身には不服のある筈のなし  
桜散れわれの内部に育てきて伐られゆくべき一樹あるなり

永 塚 節 子 風

銀

ば ば り ょ う こ

アンニュイ

鹿

舗装路を染めるはなびら街中のこんな所にちいさくらの花  
うつむきてかそか揺れいしづござくらかの一本は今も咲くらん  
あれは何時ぞろ歩きに拾いしはボタンならぬ石ころ三つ  
拾うならこういう形と指し示し平たき石はてのひらサイズ  
差し入れしクッキー頬張りコーヒーを所望せしとう笑顔浮かびく  
おりふしに互みを支えいかほどか共に来た道 一人行く道  
立ちどまり深呼吸する胸内に定家葛の香の充ちるまで

仲 西 正 子

琉球百合

沖

浜 谷 久 子

草 生

地

一日咲き一夜をかけて朝顔の色変えにつつ花たたみゆく  
天辺に楚楚と一輪咲かせたる盆栽朝顔まっすぐに立つ  
野に咲ける琉球百合はユリの母テッポウユリと呼べばうつむく  
戦にて焼かれ繰かれし野の百合に連なる命うりずんの風  
黒船の持ち船りたる島の百合イースターリリーの原種となれり  
祖国復帰五十年なり本土並みに未だならざる基地示す地図  
古酒瓶に知事と総理が泡盛の仕次ぎを為せる甘世の御願

白 子 れ い

溢れくるもの

洛

浜 本 芙 美

紅いろの風

夢

倦怠は糸を吐きつつ白獨の世界にたましいを贋悶とさせる  
一年の折り返し時点に生れさせて神は目論む折り返し点を  
月のかず十二はあれどまなかなる六月という月の口借し  
ちいさくて泣きそうな花を選びたり胸に抱きて泣かせるために  
エンピツを銛く尖らせて辛口をしゃべらせてゆく月欠けし夜  
絵空ごと描くは私のお得意の最たるひとつボアンときょうも  
あつ熱う厨で耳たぶ押さえふと 身を灼く程の恋ありし日を

どこからか庭に小雀飛べずいて震える命へなすすべのなく  
強風にあおられ落ちるか小雀の飛べない羽に時間が迫る  
留守の間を沈んだままの金魚一体もう一匹が水面をあえぐ  
掬い上げ入れ替える桶吹き返す命か金魚の泳ぎ始める  
児の転居に恥される金魚夏祭り五年を生きる相棒二匹  
仇となる汲み水まさかの急変に金魚を野末の草生に埋める  
金魚を埋め小雀埋める二日間小さきものの選べぬ生きの

若みどりさみどり濃みどり深みどり疏水辺のみちみどりのおおう  
奈良に住む弟夫婦が久しづぶりお昼と一緒にと誇いてくる  
九歳下の弟と会うは久しづぶり心は何時しか幼き日をよぶ  
進学のためそれぞれに田舎出で共に過ごせしは十年が程  
案内さるるは三人のみの部屋にして眼前に料理つき次作らる  
骨折の脚よくなりて杖つかず歩める舌を祝いくる  
身も魂も充たされ感謝一杯に溢れくるもの 言葉のつまる

残照の残れる空に何思つ只ぼう然と眺めいるのみ  
偶然にあいたる十五夜しみじみと仰きておりしがかなしくなりぬ  
在りし日のあなたの描きし裸婦の絵を仰きて朝のコーヒーを呑む  
三十年もののテーブルサンゴ鏡おりぬねむれぬ夜の収穫として  
「おーい洗濯物の出来上がり」朝のねむりの中にひびきぬ  
ひとひらの雲なき空を仰ぎおり何かさびしく何かうれしく  
九十歳のおみなの作る山の歌空の歌また紅いろの風

檜垣美保子

隣人

・昇

藤森巳行

ロシア民謡

・銀

泣きながらいやだいをくりかえすおさなこの声を吸いあげる空  
日のひかり明るくて明るくて駄々子になりたき気分 朝を揺らして  
暮れなすむ六月の夜の入り口にさくろの花のとろりつやめく  
夕近くもとれば門扉の軋み泣く音にふりむく人に会釈す  
立ち話小一時間におびたる日もあり隣の人逝きませり  
妻であり母親でありし隣人の名を百合子さんと訃報に知りぬ  
夜回りの拍子木のおと遠ざかり二丁目の方へ消えてゆきたり

福田庸子 麦畑

・今

萌ゆる葉の間を飛び交ふ鳥達のふりこぼす光<sup>かげ</sup>昨夜のしづくは  
荒れたりし休耕田に蘇る麦は大地の光を呼びて  
うね筋もわからぬほどに育ちゆる利根の南は青麦ひかる  
国産の麦を求めるこれよりはコメに頼らぬ農に応へて  
いつまでも美味追求はあり得ぬを食糧危機は目前に来し  
世界大戦より七十余年を経てなほロシアはまたも人殺しゆく  
人間のおろかさを知る文学を学びてこぬを晒すブーチン

藤田美智子

トヨちゃん

・新

カ行の單語Cで始まるはなぜと問ふ八十二歳の生徒トヨちゃん  
七十年持ちゐたりと言ふ粗惡なる紙に刷られし漢字の表を  
「かはいさう」と言ふ少女らに雛鳥を拾つてならぬ訳を伝へる  
柑橘系の香のするジェルに頭髪と心整へ子は出でて行く  
君の詠みたる短歌のなかにわが知らぬ君が確かな輪郭をもつ  
水底と聞きて思へり胸底にありていつか忘れるしもの  
雨に打たれ煙は横に流れゆく 無理に明るくしなくていいよ

牧雄彦

ひとと立つ

・大

ひとと氣なきゆふべの寺の境内に弘法大師の像ひそと立つ  
保育所を出て帰りゆく母と子の影地に踊る五月の夕べ  
丘の上の家のみ夕日に照らされてなだりの家々暗く沈めり  
町川の堰落つる水の音すなり夏の近づく音としおもふ  
石垣の石のあはひに身を伸ばし風に耐へるヒメヲドリコサウは  
君が君でなくなる時が来ようとは思はざりしよ君は笑まふに  
コロナ禍ゆゑ施設を訪ぶは叶はず生死もさだかならざり三年

このごろは酒量落ちたりコロナ禍で妻を相手に続く家飲み  
我が家から見下ろすスナック看板が愛といふ字を点滅させる  
トロイカとカチューシャの歌のイメージが崩れ去りウクライナ侵攻  
ともしひは東京新宿歌声喫茶ロシア民謡歌ひし青春  
ともしひは戰地に赴く若者を見送る歌かロシアを思ひぬ  
ゆつくりと初夏の雲は流れゆく地球は今日も回つてゐるのだ  
降る雪に香りをつける術あらむ林檎の香と詠みし白秋

松浦楨子 早雲公

・羊

三浦好博 違ひは何だ

・銚

・銚

北条の五代百年もはるかなり藤棚の下に面影を追う  
小田原の北条五代をお祭りに仕立てて映ゆる五月の兜  
武者隊の先駆けに続く早雲公 小田原市長は選舉の顔に  
睡蓮の池に飛び交う大鷗 無心の刻のほいままなり  
四月尽藤の盛りはすきゆくに身めぐりおおうウクライナの文字  
銅門に繞きいでゆく馬出門 白毛のサラブレット歩幅急がず  
石垣山一夜城より見下ろすか淀殿添えて太閤殿は

松瀬トヨ子 島人の心

・沖

宮本靖彦 オデッサ

・凌

米軍基地かえし儘の復帰五十年ヤマトの新聞記事のネガティブ  
「この島を」と縦理が沖縄を唱える時島人の怒りは遠流の心  
國のため基地受け入れよと言う勿れ命ど 宝は島人の心  
青空に高く湧き出る夏の雲基地がなければ美しき島  
戦世の空襲警報ウイルスの感染警報の空気におののく  
点滅する嘉手納の基地街にパトカーの激しき音を夕日が彈く  
爆撃機に逃げ惑いたる沖縄戦画面に見入るウクライナ戦

松永智子 蛾

・嵐

三好聖三 猫たち

・伊

白き壁白き天井その底ひ螢火目に追ふにんげんひとり  
さりながらさりながらを裡にして窓閉ざさむとし落日をみる  
十階のビルに音なく人の声遠くにありて夜のふけゆく  
人の声ものの音のいまだなく夜半きくとなく聞く聞の音  
音のなき玄闇の間ふかくして螢火ふたつ青く飛び交ふ  
夜每きてキッチンタオルに火をともす螢一匹待つとなく待つ  
玄闇の間を自在に飛びしのちそのひとくまに蒼し螢火

「屋根の上のバイオリン弾き」はいま何處ジェンソサイドより連れられしか  
ウクライナはレジスタンスにベレスチナはテロリストとぞ違ひはなんだ  
「ウクライナは独立国であるべきでない」次は何處を生け贋にせむ  
「百万人殺せば英雄」なほ今にブーチンロシアに顕在なりて  
捨てられても歌を忘れてしまつても間に合へばなほ「時代のカナリア」  
中国とロシアが世界分割の後に消滅背き地球は  
ゴキブリやハエが世界を変へ與るるSDGsには昆虫食ぞ

オーデサよりオデッサ謀略戦華やかなりし港の名前  
小麦價格世界の騰貴量りえて苦中の笑顔ブーチンの見す  
コロナ戦ウクライナ戦終そくのいづれ早きか後者なるべし  
早梅雨の窓打つ音に安らぎぬ歩かう会中止決めし昼過ぎ  
国道に沈む夕陽が舌を射すまだまのエールくるがさまに  
咲きつきし紅き椿の終り花若葉に命継ぎて落ちたり  
勤行のをはりし朝門前に紅匂ふ紫陽花開く

鍔の刃を擦り洗えば大いなる近頃あらわれくねくね踊る  
じやがいもを嫋る手の先に現れし五寸百足を足裏に压す  
猫たちの贈り物だと妻が言つしつちゃかめつちやかの家の片づけ  
この村に生き暮らして死ぬだろうおよそ不徳な（はぐれ）のままに  
家族以外の人と語ることのなき日々を楽しみ喜びながら  
なにもかもかかわりもなきことですと秘めつつ青きあら草を刈る  
歌詠むはすでに（はぐれ）とみて座る黄の蒲公英の群落のなか

## 御代田澄江

## 惜春賦

・茨

## 山下雅子

## 黄の花

・習

壺に挿す著哉の花見てきれいねと娘は言へり妬器静けし  
庭木々に水遣りをれば遠景に桜花薦長け照り映えて見ゆ  
春霞 全山桜の山を右に六号走れば花卉舞ひ来  
ある日戦争 ロシアより来て吾が心ざわわざわわと驕立ちやまぬ  
理不尽にも見せられる戦の映像誰も望まぬロシアの專横  
惜しみつつ春を送りて立夏来るに戰火は已まず国連無策  
久々に訪ひ来たり「眼はどうした」と手術後の吾を氣遣ふ息子

## 茂木斌 竹採公園

・埼

竹採公園は岳南にある轟夜姫の里比奈なる無人駅に降りたり  
駅前へ無人改札抜けたるはわれ一人のみ春の陽燐々  
もの好きにきたるものかな比奈の里延暦のころとふかぐや伝説  
竹採公園孟宗竹の生い繁りかぐや姫誕生を語りてさやぐ  
竹林の小径めぐれば白隠の墓所あり「神機独妙禪師」と刻む  
白隠の墓石に刻す戒名の勅諡と知れば勿体なきよ  
白隠禪師その著にここをかぐや姫誕生の地と断定為すと

## もとむらしげと

## 桔梗

・そ

夕暮れに逝きたるひとの魂を浮かべ木棺の一輪ともる  
門までを歩むほとりに紫陽花の雨を含みてうす青き花  
薄れゆく記憶の縁に父の背にしがみつきいし夜の紫陽花  
小坊主のさす紫の小さき傘梅雨の晴れ間にアゲラタム咲く  
紙風船ふくらみ今に駆けむと桔梗は雨に身を打たれつ  
忘れないし思いのごとくひらきたる桔梗をたたく六月の雨  
山茶花の濃きみどり葉に覆われてボストの口は小さくひらく

## 山本孟

## 初夏

・大

初物のえんどう御飯湯氣立つを妻に供えてわれもいただく  
注文の苺わが家に着いた日に一粒一口至福のしたたり  
スーパーの「お得」いっぱい買ひすぎて財布の中身驚くほど消える  
お互いに足痺えて会えない身遠い記憶の友の姿はや  
地下壕より「太陽が見たい」と児の声は最期かもしれない自決するな  
敵とせば同族であれ残虐す攻め來し兵の羞ずべき行為  
核撃てば人の住めない土地となり放射能防ぎようもなく散る

春を呼ぶれんきょうみもざ黄の花卓の小鉢に菜花香りぬ  
人気なき園をよされば鳩に会いたんぼの黄の絨毯まぶし  
こなせぬを滅退のせいにするなという千支占いに見透かされたり  
熱し得ぬ今日のノルマを思いつつまあまあ気分に仰ぐ半月  
耳馴れぬ立春寒波という予報異常気象の産物という  
ひらがなのメロディーおどる「さっちゃんがね…」思わずすみ唄えば熱し  
地震のたび福島原発にはらはらすロボットさんもお疲れらしい

## 山野幸司農

・沖

苗床に立つ我が上にホトトギス笑い行きたり梅雨を呼び寄す  
一齊に代かき始むトラクター虚しきものをならし行きたり  
青年の力を示すトラクター日本の未来君が支える  
百姓の団結漚き機械音行進曲の田んぼに流れ  
畦塗り機田んぼの角をなでいく機械専制田んぼの上に  
梅の花緑の中に実に取られ六月の陽に干され色付く  
毎日の農の作業に追われいるわが退職は天驅ける馬

養学登志子 元興寺

・凌

萩葉子 ネモフィラ

・銀

・羊

ならまちのシャッターアップが朝の音あやこや言いつつ吟行のわれら  
元興寺天平の仏黒く在し供華の芍薬寺苑に咲きそめ  
元興寺の古き舟型墓石の間著我の花咲くみすみすと咲く  
六本のかいなそれぞれに祈りあり背面金剛鬼一匹踏む  
天平の黒き仏の名の片邊ご真言の文字仮名にて書かるる  
興福寺の正午の鐘の音の響き残花の舞いて水面に浮くも  
ならまちは大小揺るる結び娘古りしを納めあらたに購う

横田敏子 アマリリス

・福

朝なさな次々ひらくアマリリス二十センチのピンクの大輪  
一本に四つの大輪ひらききりフルツを踊るバレリーナの様  
ゆづくりと少し後れて咲き初めし深紅のアマリリスの情熱の色  
玄関に並ぶアマリリスの華やかさ訪う人一瞬「わあ」と声上ぐ  
球根は年々増えて友達に友の友へと広がりてゆく  
球根となりて冬越すアマリリス今年も立派な花をありがとう  
勤めいし頃に賜いしひと株のアマリリスから三十年過ぐ

吉永惟昭 凶器本

・熊

度忘れのかく多くなり広辞苑頼るにどんと鎮座ます  
広辞苑ますこの重み抱きあぐねルーベだけはと傍に置く  
足踏んばり机上まではと持ち上ぐるに箱を抜け出でとすんと落ちる  
一度目は脛が受けた再度には足の親指本の固さよ  
ただならぬ痛みはしらす凶器本何をひくのか忘れてしまった  
結局は被爆一世の小学用国語辞典のお世話をぞなる

雨なきに紫陽花の赤色づきぬ 編集長の著書をひもとく

ネモフィラがいちめんに咲くカレンダー誕生月はさみどり五月  
祖父の家の黒光りする引き戸前帰るときいつも祖父に呼ばれて  
夏休み父の里での数日は草草の道思いつきり歩く  
タンボボがバス停までの線道に一列に咲く川風うけて  
ジーンズが日常着となり朝一番テレビ体操つづけて健やか  
ルコラの種子を持きたり小松菜と隣り合わせが明日のたのしみ  
日本海の水を汲みたる糸魚川海を知ってる書棚の小瓶

久我田鶴子 風を嗅ぐ

・羊

すこしづつ手放してゆくそのひとつは車を人手にわたす  
いぢねんに三度といふはハンドルを握りし回数 バッテリーあがる  
電車にもバスにも乗らず歩くのみ狭く生きつつ人にも会はず  
モーレツに話したくなる時があり遠くの友に電話してをり  
ああ、もうやつてられんわ 煮つまつた頭をかかへ風呪ぎに行く  
十年の保証期間に据ゑられてエアコン白く未来をやどす  
十年の保証のかぎりにあらざるを合点承知のてるてる坊主

